



翻訳における話法 : 異化・同化ストラテジーの観点から

伊原, 紀子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2004-03-31

(Date of Publication)

2013-03-18

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲3060

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003060>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 242 】

氏 名・(本 籍) 伊原 紀子 (京都府)

博士の専攻分野の名称 博士(学術)

学 位 記 番 号 博い第493号

学位授与の 要 件 学位規則第4条第1項該当

学位授与の 日 付 平成16年3月31日

【 学位論文題目 】

翻訳における話法－異化・同化ストラテジーの観点から－

審 査 委 員

主 査	教 授	中川	正之
	教 授	沖原	勝昭
	助教授	定延	利之
	助教授	藤 濤	文子
	助教授	小川	暁夫

論文内容の要旨

氏 名 伊原紀子

専 攻 コミュニケーション科学

指導教官氏名 中川正之先生

論文題目 翻訳における話法 ―異化・同化ストラテジーの観点から―

論文要旨

異文化・異言語間の差異をどのように受けとめ表現するかという選択・決定は翻訳者に委ねられている。できるだけ異文化の痕跡を残してその差異を際立たせようとする、原著寄りのアプローチを異化(foreignization)と呼び、反対に目標言語の文化規範や慣習に従って、翻訳作品を読む読者が、自国語で書かれた作品のように自然に読めるようにする、訳文読者寄りのアプローチを同化(domestication)と呼ぶ。本研究は日本語小説と英語小説の起点テキスト(ST)と目標テキスト(TT)の中の話法表現を比較分析することにより、それぞれのテキストから読者が受ける印象や表現効果の違いが何に起因しているのか、異化・同化ストラテジーの観点から明らかにし、翻訳の方法について考察する。

話法表現を分析の対照とするのは、話法には時制、人称、直示表現、ディスコース・モデルティなどの言語的な特質が表面化するため、日英間の差異が意識しやすいからである。日英対照談話分析で、小説内の話法表現に現れる言語的差異に着目することによって、話法表現の言語的特質とディスコース内でそれらが果たす機能との、ある程度一般的な傾向をみることができる。さらに、小説内の話法表現には、登場人物や語り手、あるいは読者

の受容状況を反映する様々な声が混ざり合っている。言い換えれば、話法表現は論理的・指示的意味の違いよりも、発話者の社会階層や、聞き手との社会的距離や感情(affect: Ochs and Schieffelin, 1998)など社会的意味(Ochs, 1992)の違いに関わるものである。この社会的意味は、その言語社会の文化や認知習慣を反映するため、話法表現をどのような形で取り入れるかは、読者がテキストをどう読み取って解釈するかに大きく影響し、全体の印象を形作る重要な要素になると考えられる。Dixon and Bortolussi(1996)は、小説内の話法がどのスタイルで提示されるかによって、読者の解釈の仕方が変わることを示した。また、Koven(2002)は口頭の語り(narrative)において、話し手のとるスタイルを分類し、そのスタイルによって話し手が異なった役割を演じることを述べている。

小説内の話法表現を考える時、発話の伝達者となるのは語り手である。間接話法では登場人物の発話が語り手の声で地の文に組み込まれる。引用符付きの直接話法は登場人物による発話(思考)部分として地の文とは区別されるが、日本語の小説の場合は、引用符無しで地の文の中にも登場人物の発話や思考が直接話法スタイルで現れる。また地の文でも、語り手が客観的に出来事を報告する部分と、対話者として主観的なコメントを述べる部分とがあり、後者では読者に話し言葉で語りかけることもある。これら全てを話法表現として、考察の対象にした。

4章では小説内の話法表現を分析するに先立って、翻訳と話法が伝達者を媒介にする二段階のコミュニケーションプロセスを有するという点で、類似したメカニズムを持ち、ともに伝達者の意図によって変容・非変容の操作が行われることを明らかにした。翻訳において、STの音韻レベル、語句レベル、構文レベル、語用論レベルの何を残して、何を変容させるか、つまりどこに類似性を求めるかは、異化・同化ストラテジーの決定につながるものであり、翻訳者の意図によって行われる。

5章では事例研究の第1段階として、英語小説内の様々な話法表現が日本語のテキストの中でどのように表現されているかを分析した。STで語り手の視点から客観的に述べられた地の文や間接話法、自由間接話法が、TTで登場人物の視点で直接話法として表出

されているなら、それは日本語小説内のコミュニケーションの主流規範に則った同化であり、STの直接話法や自由間接話法が、TTでは間接話法や地の文として表出されていれば異化と捉えることを提案した。英語小説を和訳する際には、話法表現を同化し直接話法スタイルを取り入れることによって、翻訳調を感じさせず読みやすさが得られる傾向を明らかにしている。

6章では英文小説内の自由間接話法を「声」や「視点」という概念から分析し、適切な日本語への翻訳を検討した。英語の3人称小説に現れる自由間接話法は3人称過去形という語り手の枠組みにあって、登場人物の声を響かせるものである。語り手の声の中にかすかに登場人物の視点を感じ取れるものから、ほとんど語り手の姿を感じさせないものまで、遠近感の度合いは様々である。視点の移行が日本語の小説ほど頻繁でない英語の小説において、自由間接話法なら登場人物の声を伝達するのに、形式上は地の文と差がないので、地の文を中断することなくめらかに進行させることができる。この距離感と近接性の両立が自由間接話法の表現効果を生むと言えるだろう。

日本語では時制や人称の体系が英語とは違っており、語りに現れる文法形式も異なっている。伝達節が無く、人称と時制が語り手の枠組みであって、同時に登場人物を示す語彙的特徴を備えた文が日本語の自由間接話法であると単純に規定することはできない。その為、登場人物の声か語り手の声かどちらかを選択して訳すことが多くなる。5章で検証したように直接話法志向性の強い日本語の小説では、自由間接話法は直接話法で明確に登場人物の声として訳されることの方が多く、読者にもその方が分かり易い。しかし小説の解釈において分かり易さだけが求められるわけではない。読者は登場人物から少し距離をとり、テキスト内外の文脈をてがかりに、響き合う複数の声を聞き分けたり、そこから皮肉やユーモアを読み取るなどのプロセスを楽しむことができるのだ。日本語では、主語によって一義的解釈を強いることが無いよう、ゼロ代名詞や「自分」、時には「彼」という表現を用い、登場人物の視点を感じさせながら語り手の口調で語る、という形式の文が自由間接話法に近い効果を持つと判定した。当該表現のテキスト前後の環境やその他のコンテク

ストが読み取りに影響することは、英語と同様である。しかし英語STの自由間接話法をこのような形式を用いて日本語でほぼ等価に訳すことが可能であっても、小説内の他の部分との関連において、読者は多くの場合ST読者が受けた印象よりも間接的に感じるであろう。その意味で話法の異化訳となる。

7章では小説の地の文として表されている部分を中心に、話し手である語り手が、聞き手である読者との人間関係や発話の場をどう捉えているかを指標するような言語表現を分析している。事例研究からも明らかのように、日本語の小説では語り手のパートである地の文であっても、登場人物に視点が移行して直接話法スタイルで話したり、語り手自身が主観的な評価を加えたり、読者に向かって語りかける場合が多く見られた。つまり書き言葉である小説の地の文の中に、話し言葉が入る余地が大きい。このような日本語小説の地の文は、語り手の感情的態度を表す装置が多く現れる。それは例えば共感を求めたり、表現を緩和したり、あるいは女性らしさや確認などを表す「よ、わ、ね」など終助詞や、対人関係や場のあらたまりの度合いを表す「です、ます」と「だ」の使い分けなどである。これらのDM標識は指示的意味と対峙した社会的意味を指標する機能を持ち、話し手が相手に対してどのような感情的係わり方をしているのかを示す。

一方、英語にも同じ様な機能を担う表現が存在する。ディスコース・マーカ―やヘッジ、付加疑問などである。その他口頭の対話であれば、呼称を特に文中・文尾に付けたり、表情やジェスチャーによって感情が表されることが多いと指摘されている。数編の小説のSTとTTの対照分析から、日本語の小説の方が、英語の小説よりも感情表現が多く付与されているのが観察された。その結果をさらに深く考察すると、日本語の終助詞は音韻的にも短く形態素として述部に簡単に組み込まれる。他方、終助詞と類似的機能を持つ英語のディスコース・マーカ―やヘッジ、付加疑問などは皆、それだけで独立して1つのイントネーション・ユニットを形成しており、日本語の終助詞が付いている所に当てはめるには量高く大袈裟になる。その他にも日本語のDM標識には「です、ます」と「だ」の使い分けや「～という」など表現態度を調整して感情を伝える便利な表現が存在する。これらの言語

上の特質から、日本語の方が英語より頻繁にこのようなモダリティ表現が付くという一般的な現象が導かれた。この事実は、日本語の小説では直接話法スタイルが多くなるという、5章で検証した結果の根拠ともなる。

7章で得られた、英語の小説には日本語の小説よりも、感情を指標する表現が少ないという判断の傍証ともなる調査に触れておきたい。バイバーとフィニガン(Biber & Finegan, 1989)は、英語の書記・口頭両方の種々のジャンルから 500 のテキストを対象に、直接的且つ明示的に話者の態度を表す語彙的、文法的マーカー(affect markers と evidentiality markers)を調査した。調査によれば、明示的な感情の表示は原則的に個人的相互作用に限定されており、私信(personal letter)にもっとも多くみられ、一般小説(general fiction)では 90%のテキストが、感情や証拠性を示す表現が相対的にごく少ないという特徴を示した。バイバーとフィニガンは、この調査結果が感情や証拠性を示す表現は英語では有標の選択であることを示唆しているが、これは筆者が本研究の3編の事例研究を通して、一貫して主張している日英間の小説における表現の違いを裏付けるものである。

このような言語の特質が小説のディスコースに影響を与え、また反対に、小説のディスコースの特徴が言語の特徴を際立たせるという密接な相互関係を否定することはできない。言語と文化が分かち難いということは今更述べるまでもないが、事例研究で分析した日英の言語的特質は、日本人のコミュニケーションとしての「直接体験的志向」や、日本と西洋の物語構造の違いとも表裏一体をなす。こうした言語上の特質を反映して、自由間接話法による微妙な声の二重映しは英語に優位なレトリック効果を発揮し、感情豊かに聞き手に話しかけたり、登場人物に視点を移して臨場感豊かに語るのは、日本語に優位なレトリックであることが判明した。

日英の対照談話分析をもとにそれぞれの言語で書かれた小説の話法表現の差異とその効果を論じてきた。翻訳の諸問題を考えるのは、この差異を TL の規範に合わせて全て形をかえればよいというわけではない。また翻訳の質を評価する際にも、SL に特徴的な表現が移されているか、消滅しているか、という表層的な現象から結論を下すのは余りに一面

的といわざるを得ない。対照言語学から得た知見をどのように生かすかは、スコパス(翻訳の目的)に依拠するし、テキスト全体で見れば、一つのレベルで達成できない類似性を他のレベルで補うことも充分可能である。口頭のコミュニケーションでは、聞き手は話者の表意を受け取るだけでなく、声の調子や眼差しなど非言語情報、又発話の状況からくる制約等からも、様々な推論を働かせて情報を受け取る。翻訳のコミュニケーションでも、意味論的意味の他に、様々なレベルで情報伝達が行われる可能性があり、それらが複雑に繋がりがあっている。ST のコンテキストから切り離し、それを全く異なった TT 読者のコンテキストに持ち込むのだから、全てのレベルで高度な類似を求めるのは殆どの場合不可能である。そこでどのレベルを最優先に伝え、どのような TT を作成するのかというスコパス決定が必要となり、それに従って有効な戦略選択が行われるのである。

翻訳者の語彙や文法の選択が、語り手の世界観、登場人物の性別、態度、社会階層や地位等を暗示し、TL 文化内で TT をどう機能させるかの選択となる。自然さや読みやすさを翻訳の目的とするなら、英語小説を日本語訳する場合、ST に表れていないモダリティを、コンテキストに応じて付け足すなどの調整が必要となろう。語彙レベルではカタカナ語や代名詞などに関して異化訳が行われていても、話法レベルで同化訳されていれば、全体として翻訳調の読みにくさは免れる。しかし文学翻訳では、読みやすさが優先課題ではない場合もある。翻訳調も市民権を得て、それを魅力に感じる読者層もいる。ST の抑制の効いた冷静な文体を移す事が目的であれば、話法の異化訳が実行されるべきだろう。より適切な翻訳を生む為には、ただ翻訳者個人の才能に期待するのではなく、翻訳理論に基づいた客観的な判断が有効となろう。

翻訳の様々な現象を一貫して話法表現という軸で捉え、異化・同化の観点から考察を加えた。そうすることで個々の事例研究が、事例固有の現象に留まることなく、ある程度普遍的な傾向を提示することができた。目的にかなった適切な翻訳を実践するために、明確で具体的な提案ができたと考える。

論文審査の結果の要旨

氏 名	伊原 紀子		
論文題目	翻訳における話法—異化・同化ストラテジーの観点から—		
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教 授	中 川 圭 之
	副 査	教 授	神 原 勝 昭
	副 査	助教授	定 延 利 之
	副 査	助教授	藤 湧 文 子
	副 査	助教授	小 川 曉 夫
要 旨			
本研究は日本語小説と英語小説の起点テキスト(ST)と目標テキスト(TT)の中の話法表現を比較分析することにより、読者が受ける印象や表現効果の違いが何に起因しているのかを、異化・同化ストラテジーの観点から明らかにし、翻訳の方法について考察したものである。 話法には時制、人称、直示表現、ディスコース・モダリティ(DM)などの言語的な特質が表面化するため、日英語間の差異を形式的に捉えやすい。また話法表現は論理的・指示的意味の違いよりも、発話者の社会階層や、聞き手との社会的距離や感情(affect)など社会的意味の違いに関わるところが大きい。従って原作者や翻訳者が話法表現をどのような形で取り入れるかが、小説全体の印象に大きく影響するという問題意識のもとに、本研究は、翻訳論という立論の難しい分野に言語学的新知見を持ち込むことを企てた意欲的なものである。			

先ず、多くの実際例を引用・比較しつつ、一般的に英語小説を和訳する際、話法表現を同化訳し、直接話法スタイルを取り入れることによって、翻訳調を感じさせず読みやすさが得られることを指摘する。

次に語り手と登場人物の声を同時に伝えるという、英語の自由間接話法の翻訳について検討を加え以下のように主張する。

日本語では自由間接話法は、登場人物の声として直接話法で訳されることが多く、読者にもその方が分かり易い。しかし小説の解釈においては分かり易さだけが求められるわけではなく、自由間接話法の効果を出すには、登場人物の視点を感じさせながら、語り手口調で語る形式が有効である。

第三に、日本語の小説では地の文においても、登場人物への視点の移行以外に、語り手の主観的評価という形をとって、直接話法スタイルが頻繁に現れることを指摘している。これは、日本語の終助詞や「です、ます」などが、英語のディスコースマーカ―やヘッジなどよりも、音韻的に短く、形態素として簡単に述部に組み込まれることが一因であると主張する。また同時に、DM標識は話し手の相手に対する感情的にかかわり方を示すもので、日本語の小説は英語で書かれたものよりも、このような感情表現が多いことも明らかにしている。

以上のような考察から明らかになった日英語の差異を、翻訳にどのように生かすかは、翻訳の目的によって決定される。すなわち、自然さや読みやすさを目指すならば、英語小説の和訳において、STに表れていないディスコース・モダリティを、コンテキストに応じて付け足すなどの調整が必要となるであろうし、STの抑制の効いた冷静な文体を移すのが目的であれば、話法の異化訳が工夫されるべきであると本研究は主張している。

本研究の骨子は『英語教育』2003年4月号(大修館書店)に望月正道氏によって3頁にわたり詳細に紹介されている。

翻訳の様々な現象を一貫して話法表現という軸で捉え、目的にかなった適切な翻訳を実践するために、具体的な提案が行われており、その完成度は極めて高いものである。

よって、学位申請者の伊原紀子は、博士(学術)の資格があるものと認める。